

## 口承文芸のテキストと文法注釈

—琉球語の場合—

西岡 敏

一 はじめに

琉球列島の言語（琉球語）が消滅の危機に瀕していると言われてから久しい。琉球語は、日本語とは姉妹語との関係にあるが、日本語と通じ合わないほど異なっている言語である。近代以降、琉球語はそれまでの使用価値を低下させ、琉球語から日本語への移行が急速に進んできた。一方で、その「危機言語」である琉球語に独自の価値を認め、研究者をはじめ、多くの人々が琉球語の記録を試みてきた。また、琉球語にも豊かな口承文芸があり、その口承文芸の総合的な記録も大きなテーマであった。

口承文芸の記録も、初期の段階では、ノートに筆記記録することのみであったが、ここ約五十年は録音録画技術の発達によ

り、実際の音声や身振りなども記録することができるようになっている。現段階における口承文芸の記録法を差し当たり、次のように分類しておく。

一次的資料……音声（映像）資料それ自体

二次的資料……音声を文字化したテキスト

一次的資料は、そのリアルな再現性において重要な価値を持つことは言うまでもない。これら資料をCDやDVDなどのデジタル媒体に焼き付けて出版される機会も増えている。

二次的資料は、一次的資料の内容（中身）を伝えるものとして存在している。音声として発せられたものを何らかの形で文字化（記号化）し、ひとまとまりの「テキスト」として定着させ、提示するのである。ただし、琉球語の場合、その「テキスト」自体は、多くの読み手である日本語話者にはほとんど分からないので、何らかの解説する必要がある。多くの場合は、和訳（日本語訳）という手段が採られる。琉球語が分からない人でも、それが分かるような形で（日本語話者に限るが）提示されるといふことである。沖縄のわらべうた（童歌）として知られる「ていんさぐぬ花」を例にとると、実際の歌そのものが一次的資料として録音・録画され、それが二次的資料として次

1

ティンサグヌ ハナヤ ほうせんかの花は(マニキュアとして)  
チミサチニ スミテイ 爪に染めて、  
ウヤヌ ユシグトウヤ 親からの教訓は  
チムニ スミリ 心に染めなさい。

琉球語のテキストに対訳が付けられ、だいたいの意味が分かるようにされている。いまテキストは仮に「カタカナ」で書かれているが、この「カタカナ」表記だけがテキストの記録に限らないことは言うまでもない。「ひらがな」「漢字仮名交じり」「音声記号」、さまざまな可能性がある。現在では、おもに、この二次的資料に基づき、さらなる研究や教育活動に応用されていくという形をとっている。本稿では、琉球語の口承文芸テキストについて、これら二次的資料がはらんできた問題点とそれらをどう精緻に構築していかかということについて、文法注釈(グロス)を付すことを含めて述べていきたい。

## 二 琉球語の口承文芸テキスト

これまで数多くの琉球語による口承文芸のテキストを集めたものが発刊されている。一つ一つを細かく挙げることはできないが、網羅的に集成されたものを挙げると、次のような刊行物がある。

①『日本庶民文化史料集成』第十一卷南島芸能(一九七五年)、および、第十九卷南島古謡(一九七一年)、芸能史研究会「編」、三一書房。

②沖繩国際大学口承文芸研究会・沖繩民話の会・沖繩伝承話資料センターによる沖繩県内各市町村誌ほか(一九七三年)。  
遠藤庄治他「編」。

③『南島歌謡大成』(一九七八年～一九八〇年) 外間守善他「編」、角川書店。

④『南島昔話叢書』(一九八三年～一九九一年) 福田晃他「編」、同朋舎出版。

⑤『日本民謡大観(沖繩・奄美)』(一九八九年～一九九三年)(東京芸術大学民族音楽ゼミナール・法政大学大学院外間守善ゼミナール) 日本放送協会「編」、日本放送出版協会。

これら琉球語の口承文芸のテキストは、「原テキスト」ないしは「方言原話」に和訳(日本語訳)が付される形を採っており、琉球語による言語作品の基礎資料として欠かすことのできないものとなっている。これらのうち、歌謡についてまとめられた①③⑤は、言語の単位における「句」も意識され、「句」ごとに改行されて整理が施されている。また、⑤は「沖繩語音節分類表」<sup>②</sup>等が見開きで提示され、「方言」の正確な表記も意図されている。

### 三 表記からみた琉球語の口承文芸テキスト

琉球語による口承文芸は、表記の面でのように記録・編集されているのであろうか。いくつかのタイプに分けてみると、次のようになる（A～E）。

#### A 琉球語が一部のみの日本語表記（一般の「漢字仮名交じり」の日本語表記）

Aのタイプは、純粹に表記の側面とは言えないが、初期の琉球語の口承文芸の記録の仕方としてあったので、ここで先ずふれておく。口承文芸の内容を日本語に翻訳してテキストとして提示する方法である。琉球語話者自身が日本語（一部、断片的な琉球語を含む）で語る場合、あるいは、琉球語で語った場合でも、その聞き手（記録者）が読み手に分かりやすい日本語に翻訳・編集して提示する。結果として提示されるテキストは、琉球語は一部のみで、それらが括弧書きや注などで説明され、後は日本語（共通語）で内容が伝えられることになる。すでに、口承文芸が記録された当時、琉球語話者も日本語（共通語）とのバイリンガルの状態が進んでおり、しかも、聞き手（記録者）の理解言語が日本語（共通語）であるから、琉球語による記録はさておいて、日本語（共通語）で記録・編集されることも多かった。ただし、テキストの中でキーワードとなる琉球語は、そのまま提示され、その意味を示すために括弧書きや注が施さ

れた。

#### B 琉球語の漢字仮名交じり表記

日本語（共通語）の表記に倣い、琉球語による口承文芸テキストでも漢字仮名交じり表記で記録されることが多い。しかし、この表記には次のような問題点がある。

1. 漢字の読みを示すためにルビが必要（琉球語の当て漢字が日本語の読みとは異なるため）。
2. 長音がされると、「ー」（長音記号）の場合と、日本語表記に倣った「う」「い」等を添える場合とが混在する（記録者が統一的な表記に無頓着である）。
3. 琉球語特有の発音が統一的に表記されない（例えば、北琉球語で言うと、声門閉鎖音 *glottal stop* を含む音など）。
4. 「分かち書き」がなされないことが多い。
- 4 番目に挙げた「分かち書き」の無しについては、日本語（共通語）の漢字仮名交じり表記を思い起こす必要がある。日本語（共通語）の漢字仮名交じり表記では、句読点は施されるが、「分かち書き」は必要とされない。日本語（共通語）では、いわゆる「自立語＋付属語」が「漢字＋かな」になることが多く、「分かち」がなくても、いわゆる「文節」や「単語」の境界が文字の違いによって把握されやすい。琉球語のテキストを文字に起こす際にも、日本語（共通語）に倣った表記が採られれば、句

読点は付いていても、「文節」あるいは「単語」ごとの「分かち書き」はなされないことが多い。このことは次の仮名表記との対比の点でも念頭に置く必要がある。最初にテキスト例として挙げた「ていんさぐぬ花」は、仮に次の上段のように「空白無し」の漢字仮名交じり表記でも書くことができる。参考として、「空白無し」のカタカナ表記も掲げる（こちらは非常に読みにくく感じられるであろう）。

飛ん砂ぬ花や 爪先に染みてい 親ぬ教し言や 肝に染みり	てい さぐぬ はな ちみさち うやぬ けくごう ちむす	ティンサグヌハナヤ チミサチニスミテイ ウヤヌユシグトウヤ チムニスミリ
--------------------------------------	--------------------------------------	---

なお、漢字仮名交じり表記でも、「分かち書き」は可能である。

飛ん砂ぬ 花や 爪先に 染みてい 親ぬ 教し言や 肝に 染みり	てい さぐぬ はな ちみさち うやぬ けくごう ちむす	ティンサグヌ ハナヤ チミサチニ スミテイ ウヤヌ ユシグトウヤ チムニ スミリ
--	--------------------------------------	---

「漢字仮名交じり表記」では、多くの記録が「分かち書き」無し  
の「漢字仮名交じり表記」となっているが、「漢字仮名交じり  
表記（ルビ付き）+ 分かち書き」が稀に採用されることがある。

沖繩の伝統芸能である組踊の詞章をテキスト化した波照間永吉・西岡敏（二〇〇四）<sup>3</sup>では、「漢字仮名交じり表記」にルビを振る形で、漢字のみならず、仮名にまで、「カタカナ」の発音の読みを付している（漢字のみの「ルビ」ではないので、「ルビ」というよりは全体の「発音」を「カタカナ」で示したと言ったほうがよい）。さらに、おもに文節ごとの「空白」も示され、「空白」のレベルも「全角アキ」と「半角アキ」の二段階に分けられて区切りを行った。ただし、琉球語独特の付属語（助詞・助詞など）が付くときには半角アキにした。（二八六頁）とテキスト編集の方針が示されている。次の例では、「日撰」の前は「全角アキ」である。断定の助動詞「やん」が付くときには「半角アキ」にするという方針によるものである。

ユカ よかる まさる 全角アキ	フイユイヤクト 日撰やこと 日撰やこと 半角アキ	ユカ 吉き日であるから 勝る日であるから
--------------------------	-----------------------------------	----------------------------

### C 琉球語の仮名表記

漢字は、意味を伝える文字（表意文字・表語文字）であるために、読みが一定に定まらないという難点がある。また、琉球語では、記録者によって独特の漢字が当てられることも多く、

その「当て漢字」の正当性が問われることにもなる。例として出した「ていんさぐぬ花」には、今回、ティンサグ↓「飛ん砂」、ユシグトウ↓【教し言】という独特の「当て漢字」を用いているが、ティンサグが「とびさこ」【飛び砂】（実に触ると種が弾け飛ぶことから）、ユシグトウのユシが「おしえる」【教える】という語源意識に基づく無理矢理の「当て漢字」である。一般には、「ティンサグ」はそのまま「ていんさぐ」、「ユシグトウ」は「ゆしぐとう」【寄し言】と仮名あるいは漢字仮名交じりで書かれることが多いであろう。<sup>6)</sup>

こうした漢字にまつわる読みの不明あるいは揺れを避けるために、琉球語テキストをすべて仮名で表記する方法も採られてきた。その際、仮名表記では、文節あるいは単語の区切れを明らかにするために、「分かち書き」が採られることがほとんどである。

ティンサグヌハナヤ	ティンサグヌ	ハナヤ	ティンサグヌ	ハナヤ
チミサチニスミテイ	チミサチニ	スミテイ	チミサチニ	スミテイ
ウヤヌユシグトウヤ	ウヤヌ	ユシグトウヤ	ウヤヌ	ユシグトウヤ
チムニスミリ	チムニ	スミリ	チムニ	スミリ

まとまりが不明 ↓ 文節「分かち書き」 ↓ 単語「分かち書き」

例示した単語「分かち書き」では、文節ごとの区切りは「全

角アキ」で、名詞と助詞の間は「半角アキ」にしてある。

琉球語の口承文芸における仮名表記の「分かち書き」の中で、語構成のレベルを細やかに捉え、八重山語の語句の「全角アキ」「半角アキ」を施しているのが、「校閲」「注作成」「語句の区切り」を波照間永吉が担当している『白保の民話1』（二〇一八）、『白保の民話2』（二〇一八）、『真栄里の民話』（二〇一九）である。最新版の『真栄里の民話』にある「語句の区切りについて」（七〇〜七一頁）において、「全角アキ」と「半角アキ」の違いは次のように判断されている。

1. 文節の間（例…アル トウクル「あるところ」、連体詞+名詞の場合も）

2. サ変動詞の名詞と「する」の間

（例…シユバ シドゥ「心配してぞ」）

3. 畳語（例…ネール コール「たびたび」）

半角アキ 1. 名詞と助詞の間（例…イバルマトウ「伊原間と」）

2. 複合語の要素間（例…バンソンガニ「番匠金」）

3. 接頭語・接尾語の付与（例…アイナマ「嫁っこ」）

4. 補助動詞・補助形容詞の付与

（例…トゥリヒョーリ「取って下さい」）

5. 同語反復の強調句（例…マサーマサー「まさしく」）

6. 打消しの助動詞（例…イルン「入れない」）

7. 自立語が付属語的になったもの

(例…アンケンドウ「それで」)

8. 動詞類と接続助詞の間(但し例外あり)

(例…ハジヤリキ「はずだから」)

「ファースター」(子どもたち)などは、「名詞+助詞+接尾語」という語構成であるが、これら要素も「半角アキ」で区切られる。

D 仮名表記(分かち書き)と音声(音韻)表記の対応

言語学や音声学の専門的な知識によって口承文芸テキストが音声(音韻)記号によって記述されることがある。音声(音韻)記号は、英字記号を基本とするので、そのテキストは自ずと「分かち書き」となる。その音声(音韻)記号に対して、体系的に対応する仮名表記(分かち書き)が添えられることもある。この仮名表記は、専門家だけではなく、テキストを提供した語り手(日本語のリテラシー保持者)たちにも理解できるように配慮されたものであり、琉球語の正書法の議論にも繋がるようなものである。「ていんさぐぬ花」を『沖縄語辞典』の音韻表記と仮名表記(体系が意識されたもの)の双方で表記すると次のようになる。/ɔ/は声門閉鎖音の記号、/ɸ/は語頭を柔らかかに発声し始める記号で、首里方言(沖縄中南部)では互いを区別するような音の違い(音韻的対立)と考えられている。

tiːŋsaguːnu hanaja	ティンサグヌ	ハナ
cimɪsacɪni sumiti	チミサチニ	スミティ
ɸujajuː ɸɪsɪgutuɸa	ウヤヌ	ユシグトゥヤ
cimuni sumiri	チムニ	スミリ

E 音声(音韻)表記と文法注釈の付与

「分かち書き」のとき、空白をどこで開けるか(更にはどの程度開けるか)が問題となるが、空白で区切られた要素自体の扱いも問題となる。言語学ではテキストに対して、音声(音韻)記号による記録を与えるだけではなく、「分かち書き」よりも更に深いレベルの区切りと区切られた部分の簡単な注釈を横書きのテキストの下に施す。この注釈が、グロス(文法注釈)と呼ばれるものである。音韻記号に文法注釈(グロス)の付いた例を「ていんさぐぬ花」で以下に掲げる。上が日本語との対応を考慮したもので、下が文法的な機能を示す要素を略号化して示したものである。|| GEN は属格助詞、|| TOP は提題助詞、|| DAT は与格助詞、-SEQ は継起接辞、-IMP は命令接辞を略号化して示している。

tiːŋsaguːnu	hanaɸja	tiːŋsaguːnu	hanaɸja
鳳仙花 = の	花 = は	鳳仙花 = GEN	花 = TOP
cimɪ+sacɪ=n	sumi-ti	cimɪ+sacɪ=n	sumi-ti
爪 + 先 = に	染め - て	爪 + 先 = DAT	染める - SEQ

ruja=nu	jusigutu=ja	ruja=nu	jusigutu=ja
親の	教訓は	親=GEN	教訓=TOP
cinu=n	sumiri-i	cinu=ni	sumiri-i
肝に	染め-る	肝に	染める-IMP

#### 四 「縦書き」か「横書き」か

スタイルの問題として片付けられがちだが、現在の日本語には、古くからの「縦書き」の様式と新しい「横書き」の様式があり、それら表記が混在している状況にある。「縦書き」テキストとは、伝統的な日本語（更には東アジアの言語）の表記法であり、日本語や中国語の古典である古文や漢文も「縦書き」で、「横書きテキスト」は、近代以降の西欧的表記法で、漢字文化圏の言語でも現在浸透しつつある。音楽の五線譜や数科学の記号など、西欧的記譜法との共存を図るため、日本語でも採り入れられてきた経緯がある。ここで考えてみたいのは「縦書き」「横書き」と文法注釈（グロス）との関係である。

日本の国語教育の現場では「縦書き」が採用されており、古文や漢文などの日本古典文学では（あるいは、場合によっては現代文学でも）「縦書き」用の文法注釈（グロス）が付けられて

いる（高校の参考書など）。このことが可能なのは、橋本進吉文法を基盤とした学校文法が仮名文字（音節文字）を基盤として構築されているからである。例えば、動詞の活用は、書かない、書きます、書く、書けば、書くう、といった「カ行五段」の活用と説明され、子音語幹 *kak-* に語尾が加わる形とは説明されない。というよりは、そもそも日本語が仮名文字という純粹の音節文字で表記されるために、仮名文字によっては子音終わりの要素で取り出すことができないのである。見方によれば、学校文法は、ほぼすべて母音終わりの要素を主要な単位とし、「縦書き」への文法注釈を可能にした文法と言えるのかもしれない。

次に、琉球語における「縦書き」「横書き」の関係を考えてみたい。琉球語も、他の東アジアの国々の文字表記と同じく、「縦書き」の伝統の中にあつた。琉球古典文学である「おもろさうし」も「琉歌集」も「組踊」の台本もみな「縦書き」である。二節で挙げた口承文芸のテキスト集も、⑤を除いてみな「縦書き」である。⑤は「横書き」であるが、これには音楽の五線譜を含む本であるという理由がある。

これに対して、文法注釈の付いた琉球語のテキストは、文法注釈が付されたテキストの絶対数がまだまだ少ないということもあるが、「横書き」が専らである。ただし、琉球語でも「縦書き」テキストへの文法注釈（グロス）が、工夫をすれば可能であると考えられる。「ていんさぐぬ花」について、「縦書き」テキストによる文法注釈（グロス）を試みれば、次のようになる。

◎日本語との対応優先

ティンサグ<sub>ニ</sub>ヌ ハナ<sub>ニ</sub>ヤ  
鳳仙花<sub>ニ</sub>の 花<sub>ニ</sub>は

チミサチ<sub>ニ</sub>ニ スミティイ  
爪先<sub>ニ</sub>に 染めて「ラ1・接」

ウヤ<sub>ニ</sub>ヌ ユシグトウ<sub>ニ</sub>ヤ  
親<sub>ニ</sub>の 教訓<sub>ニ</sub>は

チム<sub>ニ</sub>ニ スミリ  
心<sub>ニ</sub>に 染める「ラ1・命」

「ラ1」は「ラ行1型」の動詞、「接」は動詞の接続形<sup>(9)</sup>、「命」は動詞の命令形の略号である。

◎文法的機能語の略号化優先

ティンサグ<sub>ニ</sub>ヌ ハナ<sub>ニ</sub>ヤ  
鳳仙花<sub>ニ</sub>「属」 花<sub>ニ</sub>「題」

チミ+サチ<sub>ニ</sub>ニ スミティイ  
爪+先<sub>ニ</sub>「与」 染める「ラ1・接」

ウヤ<sub>ニ</sub>ヌ ユシグトウ<sub>ニ</sub>ヤ

親<sub>ニ</sub>「属」 教訓<sub>ニ</sub>「題」

チム<sub>ニ</sub>ニ スミリ  
心<sub>ニ</sub>「与」 染める「ラ1・命」

こちらは助詞も略号化して示したものである。「属」は属格助詞、「与」は与格助詞、「題」は提題助詞を示す。

首里方言をはじめとする沖縄語中南部方言は、日本語（共通語）と同じく、撥音「ン」以外に子音終わりの音節が無い。しかし、琉球語の中には、子音終わりの音節を持つ方言もあり、仮名（音節）文字という制約を考えれば、そもそも「縦書き」に不向きな琉球語の方言も考えられるであろう。

五 区切り方 — 空白・ハイフン・ダブルハイフン —

本稿の琉球語テキストのグロス提示では、いわゆる「文節」ごとに「空白」を開け、「文節」の中で「単語」に分かれるときは「ダブルハイフン」を、接辞（接頭辞・接尾辞）と解釈される場合には「ハイフン」を施している。学校文法の伝統的な概念に、自立語と付属語があるが、自立語に付属語（助詞・助詞という単語）が付く場合には「ダブルハイフン」を付けてい



る。sumiri(染める)など、「命令形接尾辞」<sup>10)</sup>と解釈する場合には単なる「ハイフン」(シングルハイフン)にしている。これら記号付与の差異については、服部四郎(一九五〇)の「附属語」と「附属形式」<sup>10)</sup>、宮岡伯人(二〇一五)の「接語」と「接辞」<sup>11)</sup>の概念等を精査すべきであるが、自分なりの結論を与えるには至っていない。なお、下地理則(二〇一八)では、複合語などに「語幹境界」ということで+記号を導入しており、本稿でも「チミ+サチ」(爪先)のような複合語に使用している。

これら区切り記号をはじめ、文法注釈(グロス)は「ある程度の統一」がないと、言語の研究者同士でも混乱する。しかし、現実問題として、文法注釈(グロス)が言語研究者によって区別であることも否定できない。これらは単なる研究者同士の意見の相違なのか、それぞれの研究対象の方言固有の特徴を示すものなのか、判断が難しいところもある。言語の研究者同士でも「ある程度の統一」(共通認識)が必要ではないか、という議論が起こり、狩俣繁久・下地理則・新永悠人らを中心に琉球諸語の「グロスの研究会」が数年前に立ち上がり、その後、通言語的な視点によって展開がなされている(UtGaP2020)。

「ハイフン」の付け方(位置)でも研究者同士で差が出ることもある。次は、同時期に出た民話テキストの文法注釈(グロス)であるが、日本語の「くすれば」(已然形条件形)に対応する形は、三者三様に「ハイフン」を施している。<sup>12)</sup>

ヤイバ	くつこい。げ	ヤタイバ
ja-i-ba	kuts-i-ba	ja-tai-ba
COP-THM-CSL	殺す-COND	COP-PSTR.LS-CSL
Shimoji(二〇一七)	重野・白田(二〇一七)	西岡(二〇一七)
伊良部島長浜方言	奄美大島浦方言	宮古島野原方言

同語形ではないので分かりにくいのが、仮に語形を「ヤタイバ」と設定して統一的に考えるならば、Shimoji(二〇一七)では、*ja-tai-ba*、重野・白田(二〇一七)に倣う付け方では、*ja-ta-i-ba*となり、西岡(二〇一七)の *ja-tai-ba* とは異なる「ハイフン」付けになることが予想される。この違いの要因は、方言固有の特徴というよりは、研究者のアプローチの仕方に依ることのほうが大きいように思われる。

さらには、個人の研究者の中においても、複数のグロスの可能性に悩まされる。例えば、西岡(二〇一六)では、「ウスガナシーメーガ」(国王様が)を次のようにグロス付与した。

ウスガナシーメーガ  
*Usuganashimee=ga*  
 国王様      =NOM      =NOM は主格助詞の略号

これは「ウスガナシーメー」全体が「国王様」その人を固有名詞的に表すということで、さらなる分析のハイフンを付与し

なかったのである。しかし、次のようにハイフン付け・グロス付けをすることもある。

*Tu-su-ganashi-mce=ga*

HONI-父-HON2-HON3=NOM ーHON は敬語接辞の略号

この後者の「敬語接辞」が三つ付いている情報も重要であるのだが（御父愛し前）、ウスガナシーメー（国王様）が一語であると認定してしまう前者の区切り方では、そういった情報が捨象されてしまう。こうした「複合語」的な語について、どの程度の深いグロスを付与するかも慎重に考えねばならない問題と言えよう。

## 六 「ゼロ形式」へのグロス

Shinoji (二〇一七) <sup>(15)</sup> は、グロス付きの民話テキストを含む宮古語伊良部島長浜方言の文法記述書であるが、その中で、形式が無いにも関わらず、「ゼロ(0)形式」として文法機能を示すグロスが付与されているものがある。

例えば、現在未来・過去などの時制（テンス）の表示を全体の文の中で義務的と考える。

*kuu-ra-n=ti* クーラインティー Shinoji (二〇一七：四二二)  
*come-POT-NEG-NPST=QT*

来るー可能ー否定ー非過去＝引用 来られない

「クーラインティー」は、*NEG*（否定辞）「*n*」と *QT*（引用接語）「*tee*」の間に「ゼロ形式」(0) が挟まれ、それに文法注釈（グロス）として *NPST*（非過去）が付与されている。これに対して、西岡(二〇一六)におけるグロス付きの民話テキスト（沖縄語首里方言）では、「ゼロ形式」へのグロスは付与していない。同じく、否定辞と引用接語（助詞）が続く例であるが、その間に「*NPST*（非過去）」があるとはしていない。

*\*wakar-a-N=di* ワカランディ 西岡(二〇一六：十一)

分かるー*NEG=QT*

分かるー否定＝引用 分かること

同種の問題は、名詞の格表示についても起こる。沖縄語首里方言では、ふつう対格（*o*）の助詞（接語）は現れない。ゆえに、西岡(二〇一六：二)では、次のようにグロスが付与されている。

*kurasi* ソーミシエータンディヌ

*kurasi soo-misec-ra-N=di=nu*

暮らし する *PROG-HON-PSFIND=QT=GEN*

(暮らし) する・継続―尊敬―過去―終止 || 引用 || 属格)

※括弧内は本稿での補足

暮らしをなさっていたとの

これも「ゼロ記号」を認めれば、次のようにグロスを変える必要が出てくる。先ほどの「非過去」と同じく、形式として現れ出ていないものを記号として抽出できるかが問われている。

クラシ 〇 ソーミシエータータニス

kurasi = 〇 soo-misec-ta-n = di = nu

暮らし = ACC する・継続―尊敬―過去―終止 || 引用 || 属格

(暮らしをなさっていたとの)

暮らしをなさっていたとの

このように、グロスを付けることの難しさについて論じてきたが、そもそもグロスを付与する自体、言わば「ラベルを貼る」程度のもので、細かな分析とは異なるのだという見解もある。確かに、言語学では、個別の形式に拘ると同時に、形態論や構文論、テンス・アスペクト・モダリティなど、文法的なカテゴリー（枠組み）で言語現象を精査してきた経緯もある。それをたった一行の文法注釈（グロス）で示すことは乱暴だ、という意見ももっともである。しかし、テキストへの文法注釈（グロス）の付与は、「原文でテキストを理解する」出発点として、決

して疎かにしてはならないと考えている。琉球語テキストを琉球語として理解することの入口として、それらに琉球語の文法注釈（グロス）を付与することは重要な存在意義がある。

七 まとめ―文法注釈（グロス）の付与と言語継承への活用―

方言原話（琉球語）の口承文芸テキストを深く知るためには、その対訳（日本語訳・口語訳）に加えて、言語の中の個別の要素が、どのような意味を持ち、それぞれの要素の関係性の中でどのように機能しているかを知らねばならない。繰り返しになるが、文法注釈（グロス）を付けることは、その要素の大きな意味を伝えることであり、その言語を知る（学ぶ）入口として必要である。

また、その語られている言語を正しく知るためには、母語話者の協力が不可欠である。母語話者に内省してもらうことによつて、正確な文法注釈（グロス）付けができる。母語話者が健在であるうちに、できるだけ多くのテキストに正しく文法注釈（グロス）を付しておく必要がある。

ただし、ある要素に何かのグロスを付与することは、その段階で、単なる「ラベル付け」にすぎないことも忘れてはならない。「ラベル付け」のみで事足りてしまつては、言語の正確な分析へと進まず、実践的活用への道も開けない。「ラベル付け」された要素の詳しい分析が必要なのであり、それによって包括的

な言語継承も可能になるのであろう。

注

- (1) 西岡敏・仲原穰、伊狩典子・中島由美「協力」『沖繩語の入門 (CD付改訂版)―たのしいウチナーグチー』二〇〇六白水社 一五六頁・一五八頁
- (2) 日本放送協会「編」『日本民謡大観 (沖繩・奄美) 沖繩諸島篇』一九九一 日本放送出版協会 八〇九頁
- (3) 波照間永吉・西岡敏「付 朝薫五番台本」、犬飼公之『琉球組踊 玉城朝薫の世界』二〇〇四 瑞木書房 所収
- (4) 右同書 二八九頁
- (5) 「飛び砂」(注1)、一五六頁。「教し」の当り字は、宮城信男『石垣方言辞典』二〇〇三 沖繩タイムス社 一一七五頁の「ユシーン」「中略」「をしへる」の訛語」を参考にした
- (6) 国立国語研究所「編」『沖繩語辞典』一九六三 大蔵省印刷局 二九二頁
- (7) 波照間永吉「語句の区切りについて」『白保の民話1』(石垣市史研究資料7) 二〇一八 a 石垣市教育委員会 八二〜八三頁。波照間永吉「語句の区切りについて」『白保の民話2』二〇一八 b 石垣市教育委員会 七七〜七八頁。波照間永吉「語句の区切りについて」『真栄里の民話』二〇一九 石垣市教育委員会 七〇〜七一頁
- (8) (注6) 四八〜四九頁
- (9) 沖繩古語大辞典編集委員会「編」『沖繩古語大辞典』一九九五
- (10) 角川書店 七六五頁  
服部四郎「附属語と附属形式」『言語研究』第十五号 一九五〇 一〜二六頁
- (11) 宮岡伯人「『語』とはなにか・再考―日本語文法と「文字のわらわ」の「第4章」『語』とその構成…・助動詞」と「助詞」二〇一五 三省堂
- (12) 下地理則「シリーズ記述文法1 南琉球宮古語伊良部島方言」二〇一八 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 くらしお出版 九頁。
- (13) Michinori Shinoji: Appendix: (1) Junaitama, a mermaid of Toorike; (2) The vernacular plate "A Grammar of Irabu: A Southern Ryukyuan Language", 二〇一七 Kyushu University Press, p412. 重野裕美・白田理人「〈言語資料〉ジョウゴの話―北琉球奄美大島浦方言による民話―」『奄美沖繩民間文芸字』第十五号 二〇一七 四頁。西岡敏「与那武岳ぬ金兄小 (ユナシタキヌカニシウザガマ)―南琉球宮古語野原方言による昔話」『奄美沖繩民間文芸字』第十五号 二〇一七 十六頁
- (14) 西岡敏「ペークー頓知話」二話―沖繩首里方言による昔話―『奄美沖繩民間文芸学』第十四号 二〇一六 二頁
- (15) (注13) Michinori Shinoji 二〇一七
- (16) (注13) 西岡敏 二〇一七 (にしおか・さとし/沖繩国際大学)